

12:20 ~ 14:30 シンポジウムⅡ

地域医療構想、地域包括ケアシステムの構築に向けた地域包括ケア病棟(床)の現状と課題

1. 3つの病院機能から見た地域包括ケア病棟(床)

(2)ポストアキュート連携型病院から

ベルピアノ病院 院長

戸田爲久

「ポストアキュート連携型病院である療養型病院にできること」

当院は 192 床の療養型病院であり、回復期リハビリテーション病棟 148 床と、地域包括ケア病棟 148 床、医療療養病棟 196 床で運用している。同一敷地内に「特別養護老人ホーム」と「サービス付き高齢者向け住宅」および訪問看護ステーションや居宅介護支援事業所、訪問介護事業所などを有する複合施設の中核として平成 24 年に設立された。同一法人内に急性期 DPC 病院を 3 病院有しており、うち 1 病院は同一医療圏内にある。その結果当院の入院患者の紹介元は法人内病院が 4 割を占め、病院全体の入院患者の 7 割が地域の急性期病院からの紹介である。当院地域包括ケア病棟ではポストアキュート例が 8 割を占めており、ポストアキュート連携型病院として機能している。一方で、二次医療圏での病床機能報告では急性期病床、慢性期病床ともに過剰な地域であり、回復期機能の充実が求められている。

このような周辺環境のなかで、当院は「地域包括ケアシステムの中で循環する連携を着実に実践し、地域のコーディネーターになる～帰ろう、住み慣れた街、住み慣れた家へ～」を基本方針として、急性期医療終了後のリハビリテーションと在宅復帰の支援、在宅療養を支えるための在宅サービスの提供を行っている。その成果は療養病棟を含めた高い在宅復帰率に表れている。

今後、地域医療構想の構築の中では当医療圏の中で不足している回復期機能を充実、向上させることが必要である。それとともに、地域包括ケアシステムの中でポストアキュート連携型病院の機能である、急性期病院の治療終了後の在宅復帰に向けたリハビリテーションとサービス調整などの在宅復帰支援を充実させ、在宅療養を支えるために通所系、訪問系のサービスだけではなく、医療ニーズの高い在宅療養患者のレスパイト入院にも対応する必要がある。また、今年 4 月の診療報酬改定において地域包括ケア病棟では在宅からの入院や緊急入院に対する対応が評価されたが、療養型病院である当院では高度な急性期医療を提供する設備や体制がないため対応可能な疾患や状態は限られるものの、介護施設や在宅療養患者の状態悪化時の入院加療に対応し、必要時には急性期病院に治療をつなぐコーディネーターや司令塔のような役割を果たしていくことは可能と考えている。今後地域が高齢化していく中で、急性期病院から回復期病床へ、そこから慢性期病院あるいは在宅療養、介護施設へとといった一方向の流れのみでは対応できないと思われる。急性期機能を持たず、自院での治療内容に制約がある当院のようなポストアキュート連携型病院において地域包括ケアシステムの中で存在意義を示していくためには急性期病院と連携するとともに役割を分担することでより地域と密接につながり、地域住民や各種施設と連携し信頼されることが大切と考えている。